

News Letter

事務局

〒 154-8533

東京都世田谷区太子堂 1-7- 57
昭和女子大学 人間社会学部
福祉社会学科 吉田研究室

INDEX

- 01：久留米大会を終えて
- 02：学会シンポジウム報告
- 03：大会シンポジウム報告
- 04：麒麟福祉財団助成事業
～サテライト企画～
- 05：実行委員の立場から
- 06：研修セミナーの報告
& セミナー参加者報告
- 07：次期大会のお知らせ
- 08：事務局からのお知らせ



01 日本精神障害者リハビリテーション学会第 25 回 久留米大会を終えて

実行委員長 内野 俊郎 (久留米大学医学部神経精神医学講座)

平成 29 年 11 月 16 日 (木)～ 18 日 (土)、久留米シティプラザにおいて日本精神障害者リハビリテーション学会第 25 回久留米大会を開催させていただきました。学会員 274 名、非会員 404 名、ユーザーおよび家族の方 92 名、学生 19 名の計 789 名にも及ぶ有料参加者に加えて

サテライト企画や市民公開講座にも約 450 名の方々の参加をいただきました。大会実行委員会ならびに大会事務局を代表して、心より御礼申し上げます。

大会テーマは「未来へつなげるリカバリー～四半世紀を経て理想から実現へ～」とし、内村

直尚大会長による大会長講演として「精神障がいを持つ人たちのリハビリテーションと睡眠・生活リズムとの関係」、特別講演には伊藤弘人先生による「精神障害者の高齢化とリハビリテーション」と池淵恵美先生による「エビデンスに基づく実践 (EBP) とパーソナルリカバリーの時代」の2題、大会企画のシンポジウムは「熊本・大分地震におけるリハビリテーション」と「リカバリーを目指した支援のこれまでとこれから」の2題、学会企画シンポジウムには「精神障害リハビリテーションにおけるチーム医療の可能性」が中心となってプログラムを組み立てました。

一般演題は研究報告に42題、実践報告が78題の発表があり、精神障害者リハビリテーション学会の特徴である自主企画も18企画、さらには6つのランチョンセミナーも行われました。大会参加者も含めまして16日のサテライト企画には約300名、18日の帯木蓮生先生による市民公開講座にも約300名の聴講者がお出でになり、

大変に盛況のうちに学会を終えることができました。

プログラムによっては会場間の移動に不便な場合もありましたし、受付等の対応でもご不便をおかけした場面も多々あったと思いますが、会場にお出でいただいた皆様のご寛容とご協力によって大きな滞りをきたすことなく大会を終えられましたことをこの場を借りて改めて感謝申し上げます。次回、早稲田大学で皆様にお目にかかれまことを楽しみにいたしております。



02 久留米大会 学会シンポジウム

第25回久留米大会 学会シンポジウム報告

精神障害リハビリテーションにおける

チーム支援の可能性

相澤 欽一（障害者職業総合センター）

チーム支援を難しくする要因はさまざまある。精神障害のある人の問題を医療管理の視点のみから捉え、生活の支障や制約から支援を検討する視点が弱いこと、医師以外の専門職が医師の専門領域を超えたことにまで医師の判断を求め、法的に医師が指導的立場にあること（「主治の医師があるときは、その指導を受けなければならない」など）、医師が職場の上司や雇用主である場合が多いこと、チーム支援が適正に評価されない診療報酬の仕組みがあること等々、

問題を挙げていけばきりが無い。

そこで、本シンポジウムは、現状や問題を探るのではなく、現状の中でも、様々な人がそれぞれの専門性を活かし、本人を中心にしたチームの力を発揮するため、どのような視点や工夫が求められるのか、実践的なヒントを見いだす場にしたいと考えた。

筆者がシンポジウムの趣旨説明をした後、本人のニーズを実現するためのチーム支援のさまざまな実践（①多機能診療所におけるチーム支援が

機能するための仕掛けや工夫などについて 医療法人社団宙委会／肥田裕久氏、②院内及び地域の支援機関とのチーム支援が円滑に行われるための日々の取組やその中でのP S Wの役割などについて 医療法人欣助会吉祥寺病院／花立幸代氏、③チームメンバーが対等で慈しみのある関係性を構築するための多職種アウトリーチ・チームにおける対話的实践について 認定NPO法人リカバリーサポートセンター ACTIPS / 下平美智代氏、④退院を希望したある入院患者さんの支援例を基にチーム支援の際に誰とどのように組むのかという視点について 社会福祉法人 巣立ち会／田尾有樹子氏) が報告された。その後、シンポジストの報告を受け指定発言者(WING-NETWORK すべいる／佐々木理恵氏、もくせい家族会／佐藤美樹子氏) とコーディネーター(メンタルヘルス診療所しっぽふぁーれ／伊藤順一郎氏) がリフレクティブ的に対話→シンポジスト同士が対話→フロアの人同士が小グループで話し合い→フロアからの質問や意見→

シンポジストや指定発言者の話し合い、という順でシンポジウムは展開された。

シンポジウムでは、リフレクティングという手法(家族療法の実践的アプローチとして始まり、組織風土改善のための組織内対話やグループスーパービジョンにも用いられ、何かを解決したり結論を導くのではなく、いろいろな意見が交わされ、そこから新たな方向に会話が進むこと、今まで語られなかったことが語られ新たな角度からの理解が深まることを目的としている) が意識された。

シンポジウムでは何らかの結論を導き出すというより、シンポジウムで話し合われたことの中から参加者がそれぞれ自分の問題意識に引き付けて実践上のヒントを見出してもらうような感じで展開されたように思われる。このため、シンポジウムで展開されたことの受け止め方は人それぞれではないだろうか。シンポジウムの詳細については、学会誌で報告を行うのでぜひそちらをご覧ください。

03 久留米大会 大会シンポジウム

第25回久留米大会 シンポジウム | 報告

熊本・大分地震におけるリハビリテーション

大江 美佐里 (久留米大学医学部神経精神医学講座)

2016年4月に起きた熊本・大分地震では、4月14日にマグニチュード6.5、同月17日にはマグニチュード7.3の地震が九州の地を襲った。熊本県では震度7、大分県では震度6弱の揺れとなり、家屋の倒壊、大規模な土砂災害や断水など大きな被害が出た。シンポジウム1では被災地区に近接した地域での開催となったことから、大会プログラム委員会での協議の結果、本シンポジウムが企画された。医療、心理、福祉、当事者の立場から4名のシンポジストを招き、多角的視点から熊本・大分地震被災と当事者の

生活の変化・再建について語っていただくよう企画を立案した。シンポジストは以下の4名であった。

倉田 哲也 (社会福祉法人 くまもと障害者労働センター)

松永 哲夫 (社会医療法人ましき会 益城病院)

篠原 憲一 (社会福祉法人 やまびこ福祉会 就労継続支援多機能型(A型B型) ゴー・スロー施設長)

矢島 潤平 (別府大学文学部人間関係学科)

さらに、久留米大学で精神科リハビリテーション

に取り組み、かつ災害後のメンタルヘルスにも造詣が深く、久留米大会での講演を依頼した福島県立医科大学の前田正治氏に座長と議論の際の司会的な立場をとって頂いた。

倉田氏の発表時には、配布資料として『熊本地震から見えてきたもの』と題された記事コピー、『足で生きる哲ちゃんと呼ばれています』と題されたプリントが配布された。インターネット上でも身体障害者として初めて足のみで運転免許を取得した様子を動画等で見る事が出来る。倉田氏の発表ではこうした経緯のほか、自身が1990年から代表であるくまもと障害者労働センターの事務所を障害者避難所として開放したことなどが発表された。

松永氏からは、熊本地震により最も被害の大きかった医療機関の一つである益城病院の被災の状況と復興への取り組みが発表された。内容については、益城病院のホームページより、病院の臨時広報誌「あの時わたしは～熊本地震を振り返る～」に詳細が記載されており、ダウンロード可能となっている。

篠原氏の発表は、就労継続支援A型を運営する立場から、熊本地震の発災から時系列に沿って詳細に当時の状況が報告された。発災当時福祉避難所の存在は明示されなかったこと、要行動援護者名簿を用いた安否確認の時期が遅かったことなど、多くの問題提起がなされていた。

矢島氏は大分地震後に行われた実践活動と調査について発表した。大分県別府市や由布市では強い地震の揺れが認められたが、熊本と比べて取り上げられる機会が少ないことから、本発表は大分県での状況を聞ける貴重な機会となった。

討論では、災害以前にそもそもどのような問題があるのか、対策をどう考えているのか、という点が重要であり、災害により元々の問題が拡大する傾向にあること等が議論された。

災害と精神科リハビリテーションという2つの分野を組み合わせたシンポジウムがこのように充実した内容になったのは、シンポジストの皆様、大会プログラム委員の先生方、大会事務局の先生方、そして当日聴衆となって頂いた方々のおかげであり、ここに感謝申し上げたい。

04 キリン福祉財団助成事業

第25回久留米大会 サテライト企画

多彩なプログラムで『私たち「元気」にリカバリー』！

サテライト企画責任者 倉知 延章（九州産業大学国際文化学部臨床心理学科）

今回で本学会のサテライト企画は終了だとか。ならば、最後はノリノリで行こうと、多彩なおもちゃ箱のような内容を企画しました。参加していただいた130名あまりの方々、享受できたでしょうか。おもちゃ箱の中身を順にご紹介します。

スタートはウォームアップを兼ねて歌のステージ。オープニングはACT利用者たちによるコーラスグループ“グリーンローズ”です。「世界に一つだけの花」「花は咲く」をオルガンとともに熱唱してくれました。続いての登場は喜納朱

那さん。「世界の約束」「糸」「ふるさと」をギター演奏とともに素晴らしい声で歌いあげてくれました。会場はうっとり聞き入り、歌い終わると大歓声です。

第2幕は、スピーチ「私のリカバリー」です。太田清香さん、神尾典浩さん、川名聡子さん、大崎裕子さん、そして柴東雅俊さんがリカバリー体験を語ってくれました。神尾さんの涙、太田さんの引き込まれるようなリカバリーストーリー、そして柴東さんは誕生日だったので、サプライズで会場みんなによるでハッピーバース

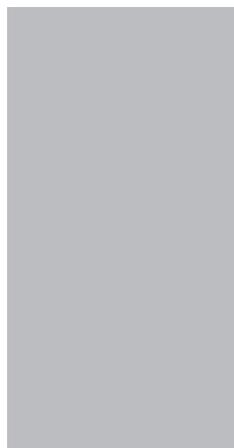
デーの合唱と花束。柴東さんの笑顔が、そしてみんな素敵でした。

そして第3幕は“表現塾”による群読ワークショップ。表現塾は、福岡で2001年より精神障がい者を中心とした表現の場として活動を開始。現在は、病気の有無にかかわらずあらゆる人が水平な関係で集い、「表現の楽しみを共有する場」となっています。今回は、表現塾メンバーが書いた詩「ファミリー」をどなたでも参加できる、群読（声を出して読む）として会場の皆さん、表現塾メンバー、そしてピアニストの河合拓始さんと共に、言葉と声の織りなす朗読を楽しみました。このように、第1から第3幕までは会場とステージが一緒になって楽しみ、笑い、涙し、感動した内容でした。

最後の第4幕はパネルディスカッションです。第3幕までとは趣を変えて、「リカバリーを側面的に支えるために 私たちは・・・」というテーマでディスカッションしました。富田醫院で精神科医をしている富田伸さん、Q-ACTでケースマネージャーをしている白石泰三さん、訪問看護ステーションで当事者スタッフとして働いてい

る山中康弘さん、そして精神障がい者家族の藤島扶美子さんがそれぞれの立場でリカバリーを側面的に支えるための活動について語ってくれました。

3時間半があつという間に過ぎてしまうほど濃い内容でした。本企画では、精神障がいのある当事者を主役に据えて、リカバリーをテーマに多様なプログラムとしました。会場と舞台が一体化した、暖かな雰囲気が印象に残っています。またやりたいですね。



05 第25回久留米大会を終えて ～実行委員を代表して～

富野 佳紀 (久留米大学病院精神神経科病棟)

今回、日本精神障害者リハビリテーション学会第25回久留米大会において、プログラム委員、座長として運営に携わらせていただく機会をいただきました。多職種の支援者の皆さんはもちろん、当事者やそのご家族の方々も参加される全国規模の学会でこのような機会をいただいたことを、大変光栄に思っております。

本学会のテーマは、“未来へつなげるリカバリー”でした。リカバリーを考える上で支援者として大切なことは、当事者の方のストレングスを信じてあげることだということを、今回のプログラム委員、そして座長としての参加を通じ、あらためて考える機会となりました。各プログラムでは、それぞれの立場で支援者、当事者、ご家族の協働により推進され、それぞれの地域性や個別の特色を生かしたたくさんの活動について知ることができ、学術報告・実践報告ともに深い学びをいただくことができました。

そして、学びとともに皆さんのお話から伝わったのは、活動の中での熱意と姿勢です。これは心理教育に携わる機会に先生から教わり、今も大事にしたいと思っていることですが、私たち支援者が、ストレングスを信じ大切にすること、その姿勢を伝えていくことがリカバリーにつながることであるということ、この機会を

通じて再確認することができました。

急性期治療病棟で看護師として勤務している私にとって、当事者の皆さんの人生とそのリカバリーを見据えると、その中での3か月は時間としてはほんのひとつきであり、果たして自分自身が当事者の皆さんのリカバリーのためにどれだけお役に立てているか、自信が持てず自問自答することもありました。しかし、今回皆さんの取り組みと熱意、姿勢に触れたことで、私自身が自分の立場での役割を果たすべく、技量を磨くとともに推進力を高めていくこと、そしてストレングスを信じ、思いと姿勢を伝え続けていくことが、当事者の方々のリカバリーに向けた支援につながるのだということ、あらためて感じることができました。これからは私の立場で当事者とご家族の伴奏者として協働し、リカバリーを意識し見据えた支援を継続して行っていきたいと考えます。

本学会の参加・運営を通して、あらためて自分自身の足もとを見つめ直し、今後を見据えて活動を継続していくためのエネルギーとなる貴重な機会をいただきました。今回お力添えいただいた全ての皆さまにこころより感謝申し上げます。

ありがとうございました。



06 久留米大会 研修セミナー報告

研修担当理事 平賀 昭信

第25回久留米大会時研修セミナーは、2017年11月16日(木)の午後に久留米シティプラザ(福岡県久留米市)で開催されました。多くの参加をいただき感謝申し上げます。

今回の研修セミナーは、例年行われている10セミナーを17時30分から20時30分まで同時に実施し、219名の参加をいただきました。会員が74名、非会員が145名の参加でした。会員・非会員比率は、約3対7の割合でした。

講師や参加者のおかげで、無事に終了できましたことをご報告いたします。

平成29年度の研修セミナーは、2018年12月14日(金)に第26回東京大会(東京都新宿区)時に早稲田大学で開催予定です。詳しい内容が決まり次第お知らせいたします。

最後に、研修セミナー開催・運営のため、ご準備いただきました久留米大会実行委員の方々へ感謝申し上げます。



セミナー参加者報告

学会に参加してみて

小澤 藍 (東大病院精神科デイホスピタル)

今回の久留米大会の研修セミナーでは、事例提供をする機会をいただいた。臨床歴3年目にして初めての経験であり、どの事例を選ぶか、どれくらいの情報を用意するか、どうまとめるかなど迷うことばかりであったが、準備段階から講師の植田先生にご指導いただくことができ、じっくりと考えて用意することが出来た。

当日は、多職種の方々が集まる中、グループワーク中心に発表者と会場とのやりとりをしながら進めていく方法であった。事例のことはよくわかっているつもりでいたが、会場から質問をされることで、事例について私自身も知らないことがたくさんあることに気づかされたり、医療の現場にいと、病気や障害の側面について目が行ってしまいがちだが、その背景にある人生や日々の生活の部分にも目を向ける必要があるという学びがあった。自分だけでは気づかない見方があることを知り、多職種連携のメリットを

感じる事が出来た。また、沢山の情報を白板二枚に収めていくまとめ方はわかりやすく、当院のカンファレンスの中にも取り入れられる手法であると感じた。

セミナータイトル通り「どう手をつけたらいいのか分からないケース」ではあったが、情報を整理していただけたことと、沢山の多様なご意見をいただけて、『明日から生かしてみたい!』と思うことが出来た。実際に、職場に戻ってからはいただいた意見を参考に臨床に取り組んでおり、迷うことがあっても、このセミナーで得た手法を思い出し、臨床に取り組むことが出来ている。

事例発表は、難しそうだという先入観や恥ずかしさがあり、始まるまでは緊張や不安でいっぱいだったが、終わってみると有意義で貴重な経験であった。この先も機会があれば是非参加したいと思う。

07 第26回東京大会のご案内

第26回東京大会 大会長 田中英樹

日本精神障害者リハビリテーション学会の第26回大会は、本年12月14日（金）～16日（日）、早稲田大学本部キャンパス国際会議場で開催されます。本大会のメインテーマは“ 広げよう！ベストプラクティスのうねりを！ ”です。今大会は久しぶりに開かれる首都東京での大会であり、多くの方々がわが国の精神障害者リハビリテーションに関する実践と研究を発表し、活発な議論を深め、未来につながる発展のステップになればと考えております。

本学会は、関連領域の方々、当事者の方々、市民の方々にも開かれた学術団体として3年の準備期間を経て、1995年に創設されました。創設された年には、精神保健福祉法が成立し、これを契機にその後、精神保健福祉士の誕生、入院中心から地域生活中心の流れ、障害者総合支援法の制定など、地域基盤の良質な医療、科学的な精神障害者リハビリテーション、生活支援や就労支援などの障害者福祉施策の前進などに見

られるように、この四半世紀は精神障害者リハビリテーションにとって薫風の流れが形成されてきました。各地で優れた実践が紹介され、わが国でもベストプラクティスが生み出されました。本大会で、こうしたわが国の到達点を確認し、近未来図を描ければと思っております。

本大会の詳細はまだ決まっておりませんが、大会当日は記念講演など各種講演をはじめ、学会主催シンポジウム、大会主催シンポジウム、一般演題、研修セミナー、市民公開講座などを企画し、1,000名を越えるの参加者をお迎えする予定で首都の力を結集して準備致しております。会員はもとより、非会員の皆様方を含め、多くの研究発表や実践報告にエントリーして頂きたいをお願いするものです。

どうか多くの皆様のご参加をお願いすると共に、早稲田大学で皆様とお会いできることを心から楽しみにしております。

08 事務局からのお知らせ

会員の皆様へ

- ・先日、学会誌 21 巻第 2 号を送らせて頂きました。ご寄稿頂いた方々や編集委員会の皆様による力の入った充実した内容となっておりますので、ぜひご一読ください。
- ・年度末にかけまして、会費の納入頂いていない方につきましては、督促状を送らせていただきます。会費納入にご協力のほどお願い申し上げます。
- ・常任理事改選の選挙にご協力いただきまして、ありがとうございました。
なお、新しい常任理事について選挙結果は以下のようになっております。
- ・名簿（これは 1/10 以降にお送り致します。） 1 ページの予定です。
- ・新執行体制については次回理事会で討議の上、ご報告申し上げます。

事務局 吉田 光爾

選挙結果

(定数 20 名)

当選

氏名	職種	得票数
伊藤 順一郎	精神科医	205
池淵 恵美	精神科医	166
岩崎 香	精神保健福祉士・社会福祉士	129
田中 英樹	精神保健福祉士	121
安西 信雄	精神科医	87
相澤 欽一	障害者職業カウンセラー	82
下平 美智代	看護師・心理臨床技術者	79
内野 俊郎	精神科医	78
山口 創生	精神保健福祉士	72
山根 寛		71
半澤 節子	看護師・保健師・精神保健福祉士	70
後藤 雅博	精神科医	70
西尾 雅明	精神科医	69
佐藤 さやか	心理臨床技術者	54
安保 寛明	看護師・保健師・精神保健福祉士	50
吉田 光爾	精神保健福祉士・認定社会調査士	47
高山 千恵美	精神保健福祉士	44
平賀 昭信	作業療法士	44
浅見 隆康	精神科医	40
須藤 友博	精神科医	33

次点

若林 功	障害者職業カウンセラー	25
------	-------------	----

落選

松田 康裕	精神科医	21
市来 真彦	精神科医	10